

山縣有朋に憧れる、最後の帝国官僚の正体

葛西敬之「傲岸不遜のトンデモ言行録」

ゴリゴリの超保守派で知られるJR東海の「天皇」こと、葛西敬之。抑え難い自己顕示欲も手伝ってか、種々の発言を残している。そこから垣間見えるのは、自身を「大日本帝国官僚の末裔」と位置付ける、時代錯誤的な自画像だった――。

小誌JR東海問題取材班

2014年の年末。東京・虎ノ

門のホテルオークラ「山里」で首相の安倍晋三と会食したJR東海の代表取締役名誉会長、葛西敬之は、正月休みにどんな本を読むべきかと聞かれ、すぐさま東大時代の恩師である岡義武の『山縣有朋 明治日本の象徴』（岩波新書、1958年）を挙げたという。

葛西と言えば、財界きつての保守派の論客であり、安倍を囲む財界人の集い「四季の会」を主宰する。毎晩のように安倍と電話で遣り取りして託宣を授けているようで、「本人は中曽根康弘の軍師と呼ばれた瀬島龍三のつもり」（JR東海OB）。もっとも、瀬島は中曽根につないだのは他ならぬ葛西というから、それ以上の存在と

自認しているかもしれない。

18年1月によくやく代表権を返上した葛西だが、この特異な経営者が尊敬してやまない歴史上の人物こそ、山縣有朋なのである。

明治の元勳のひとりである山縣であるが、司馬遼太郎が『坂の上の雲』で描いたように、「才能・識見は人並みだが官僚統制に長け、巧みな論功人事を通じて強大な長州閥をつくり上げ、政官界を操った陰險な策謀家」との評価が世間では一般的だ。「帝国陸軍の父」とも呼ばれ、敗戦の遠因をつくった政治家ともされる。

しかし、葛西はかつて『文藝春秋』（10年12月号）に寄せた記事で、先の司馬の山縣評について「それでは明治の官僚制度を構想し、建

設し、長きにわたって支配し続け

た山縣の力の秘密を説明できない」と反論し、山縣の再評価を促している。山縣こそが、明治時代から現在に至る日本の官僚制度の礎を築いた――。葛西が尊敬する理由はそこにある。

「超保守思想」の原点

「あの人はね、帝国官僚の末裔のつもりなんですよ。そこにある人を理解するカギがある。戦前ならではの『エリート集団たる官僚こそが国家を動かす』という考えの信奉者なんです」

葛西に仕えたJR東海のOBのひとりはその評する。事実、本人もこんなことを語っている。

「僕はこれまで、国鉄時代に日本

帝国の官僚として身に付けた素養

を経営に応用してきた。国会対応や他の官庁のことを俯瞰的に見る「横軸型」の人間です。今のJR東海で育ってきたのは、一つの事業を深掘りする「縦軸型」の人間。

……私は、横軸型の人間は外から移入するしかないと思う。例えば、経産省や財務省、警察庁など人間を採用することで、横軸と縦軸の最適解を作っていくるかもしれない」（週刊ダイヤモンド）17年3月25日号

インタビュは、当時まだ代表権を握ったままの葛西に、いつ後進に道を譲るのかと尋ねたものだったが、図らずも葛西が国鉄官僚としてキャリアを積んだことへの自負が強く滲んだ。曲がりなりに



子弟の語らい（14年2月、正論大賞贈呈式にて）

も東証一部上場の民間企業であるJR東海に霞が関OBを招き入れる発想自体、アナクロニズムという他ないが、ともあれ、そうやって国家を背負っているつもりなのだろう。こんな発言もしている。〈JR東海は私鉄とは違う。鉄道を敷いて、あとは鉄道以外の沿線の不動産でもうければいいというわけにはいかないんです。「国家の鉄道」を背負いながら、経営手法は民間企業のように自律的な意

思決定で経営する（同前）
リニアを目前で整備するとぶち上げた稀有壮大な発想も頷ける。
ところで、葛西を語る上で欠かせないのが、靖国神社の総代を務めるほどのゴリゴリの保守思想と左翼運動への憎悪と云うべき強い反感である。それは早くも東大在学中から現

れている。60年前後の当時は、日米安保条約の改定に反対する運動が吹き荒れていた。葛西はこんな経験をしたという。
〈東大の駒場キャンパスでも、クラス討論会が続いた。聞いていると、「安保改定をいかに阻止するか」という話ばかりしている。話が偏っていても、誰も何も言わない。それでいいのかと思ひ、疑問をぶつけた。
「日本の安全保障について、何も

勉強していない。安保条約の条文さえ、誰も読んでいない。まず、日本の安保の現実とあるべき姿を議論してから、反対か賛成か決めるべきではないか」
すると、討論のリーダー格から、「きみは、遅れているね」という答えが返ってきた」（『週刊朝日』04年2月27日号、一部改行変更）
大学卒業後に国鉄に入社してみ

たものの、あまりの仕事のつまらなさに退社も考えたというが、3年目にして米国留学の経験を得る。留学先は中西部のウイスコンシン大学である。
英語が不得手の葛西はかなり苦労をしたそうだが、それでも米国に人脈をつくり、留学先で友人を得た。のちに大阪高検検事となる頃安健司であり、ヤマサ醤油会長の濱口道雄である。頃安は現在のJR東海の社外取締役、濱口は四季の会メンバーだ。旧友を公私で厚遇する性向は安倍とも通じる。
この大学で葛西が経験したのが、大規模な学生運動だ。当時の黒人差別を背景に黒人学部の創設を要求する学生団体に対し、大学

当局は警察を導入。警察官だけでは対応しきれないと見るや、3千人余りの州兵が装甲車を繰り出しキャンパスに乗り込んで来た。実弾で武装した州兵の力で運動を封じ込めたわけだ。まるで香港での反政府運動の弾圧を彷彿とさせるが、なんと葛西、これに感銘を受けたのだそう。著書『明日のリーダーのために』でこう書く。
〈ウイスコンシン大学の処置と、かつて学んだ東大のやり方は対照的で強く印象に残りました。……さまざまな局面における日米間の行き違いを見るたびに、私はこの時のことを思い出すのです。同じ問題に対するかくも著しい対処方法の差異、それは大変印象的であり、示唆に富んだ経験でした〉
左翼運動に対する嫌悪は、留学後の国鉄人生で一層強固にされた。国鉄で葛西は、静岡鉄道管理局や仙台鉄道管理局で総務部長、さらに職員課長や職員局次長と、労務畑が長い。国労や動労、鉄労の三大労組が職場放棄やサボタージュを繰り返すのに対し毅然とした態度を取れば取るほど、組合か

らの嫌がらせや吊し上げに遭う。

『暴君 新左翼・松崎明に支配されたJ R 秘史』(牧久著、19年)

で詳述されたように、J R 東海の副社長時代に女性とホテルに入るところを組合関係者とおぼしき者らによって隠し撮りされ、週刊誌に写真を掲載されるといふ醜聞に見舞われたこともあった。

「そんな経験が葛西さんをゴリゴリの超保守思想へと向かわせた」と前出のJ R 東海OBは語る。

米国と核兵器シェアすべし

安倍との関係の近さがよく言われるが、もともと葛西が近い政治家は与謝野馨(17年死去)である。むしろ、「若い政治家を紹介して欲しい」との葛西の求めに応じて与謝野が紹介したのが当時、官房副長官だった安倍だ。

その与謝野とは東大同期でともに机を並べた仲だ。与謝野は衆議院議員となる前は、母親の知人だった中曽根の紹介で日本原子力発電の職員をしていた時期があり、政界きっての原発推進派。葛西はその感化を受けたという。

東日本大震災による原発事故の

衝撃から醒めやらぬ13年に行った講演では、「原子力は安全にマネージメントできる。放射能とは、日常生活の中で共存し、有効に活用できる。日本の産業は原子力を活用した安い電力なしに成り立たない」と持論をぶち上げている。

福島第1原発事故を目の当たりにしてもなお不感症の葛西だが、原子力との親和性の高さゆえか、核兵器へのアレルギーとも無縁のようだ。産経新聞発行の『正論』19年3月号では、米国との核兵器シェアを議論すべきと主張する。〈中国は今、北朝鮮の「火遊び」を米国に対する好ましい牽制球だと見て放置していますが、その結果、日本が米国と核兵器をシェアすることになれば、慌てふためく

ことは確実です〉

非公式の場では「日本海沿岸に米国製の地对空ミサイルを並べ立てれば、中国や北朝鮮なんてすぐ黙り込む」などという私的国防論を開陳しているというから、本人の中では、すでに核弾頭の搭載も視野に入っているのだろう。

葛西はその親米ぶりでも知られる。元国務副長官のリチャード・アーミテージと親交を結び、J R 東海の取締役にはアジア担当の大統領特別補佐官だったトーマス・パターソン、米テキサスへの新幹線輸出を進めるUS JHSR代表には元国防次官補のリチャード・ローレスを据え、国務省の日本部長だったケビン・メアも参加させるなど、共和党系の「ジャパン・ハンド」を丸抱えする。葛西は安倍政権のもとで内閣府の宇宙政策委員会の委員長を務めるが、ここでも米国への擦り寄りが目立つ。

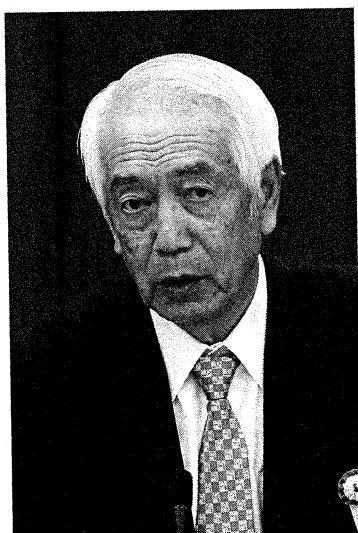
「米国のGPS(衛星測位システム)の日本版計画を進めるよう盛

んに求めています。この裏には、

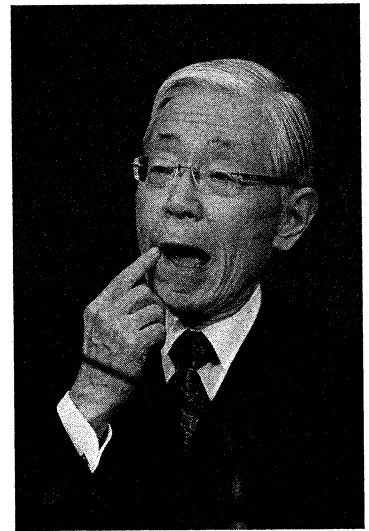
中国によって米国のGPS機能が破壊された時に備えて日本にそのバックアップ機能を持たせたいという米側意向があり、その片棒を葛西氏が担いでいたのです。最近では、米国が進める有人の月面探査計画に日本が参加することが決まりましたが、これも葛西氏が米国の意を受けてゴリ押ししたものの(内閣府関係者)

親米の裏返しでその反中ぶりは徹底しており、それを公言して憚らない。例えば、『WILL』06年9月号での石原慎太郎との対談では、「十年以内にあの国(中国)は五つか六つの分裂国家になると思うな。その方が彼らにとってよっぽど幸せだよ」と放言をする石原に、「東北三省が、今不満を強めているんですけど、これらの地域では、もともと漢民族でなく満州族ですから、もし中国政府に対して動き出した際は制御不能だと言われています」と、根拠薄弱な持論で負けじと応じている。

J R 東日本や川崎重工業が中心となって中国に新幹線の技術移転



捨てられたNHK会長(松本正之)



試されるNHK新会長（前田晃伸）

を務めていた。13年には正論大賞を授賞したが、その理由は「日本の立国の基本として日米同盟を重視し、外交・安全保障から教育、原発問題まで本質を見定めた論が大賞にふさわしい」からだそう。大賞の贈呈式には安倍も駆けつけている。

を進めた時は、「あんな安全性軽視の国に新幹線を運行できるわけがない」と強く反発。11年に中国浙江省で中国版新幹線の事故が起きるや、「だから言っただろ」と得意満面にJR東海社内で触れ回っていたそうだ。ちなみに、連結子会社の日本車両製造は18年10月の台湾特急列車事故で設計ミスを指摘されている。

取り巻きだった川勝平太

公益企業のトップながら、やたらとメディアで持論を打ちたがるのは、生来の出たがりゆえか。

思想信条を同じくする産経新聞では、一面コラム「正論」で「今こそ強力な長期安定政権を」といった高説を垂れるばかりか、19年まで報道検証委員会の社外委員

を務めていた。13年には正論大賞を授賞したが、その理由は「日本の立国の基本として日米同盟を重視し、外交・安全保障から教育、原発問題まで本質を見定めた論が大賞にふさわしい」からだそう。大賞の贈呈式には安倍も駆けつけている。

JR東海の完全子会社が発行する同名雑誌「ウェッジ」。社内では「葛西さんの御用雑誌」と揶揄される通り、かつては葛西に編集方針を説明する通称「御前会議」が定期的に開かれていたという。原発推進や農協叩きの企画は、いずれも葛西の強い意向なのだとか。

前国家安全保障局長の谷内正太郎、安倍官邸のスポークスマンである元日経BP記者の谷口智彦、政治学者の中西輝政、宇宙政策委員会などで葛西を支える委員長代理に就く惑星科学者の松井孝典ら、いずれも保守色の強い面々を取り巻きとし、パトロンよろしく、ウェッジから書籍を出版させている。そうした葛西のお気に入り研究

者だったひとりに、川勝平太がいる。早稲田大学や国際日本文化研究センターで経済史の教授だった川勝とは、第1次安倍内閣でもとくに教育再生会議の委員となる仲で、ウェッジからも複数の書籍が出ている。ところが、川勝は静岡県知事になるや葛西と距離を置き始め、リニアの工事を巡ってJR東海と鋭く対立する関係にある。

「川勝だけは許さん」——葛西はそう公言しているそうで、メディアでも川勝叩きが激化している。可愛さ余って憎さ百倍のようだ。葛西による公共放送NHKへの介入も、会長交代時の風物詩だ。その嚆矢が11年に会長となった元JR東海副会長の松本正之。かねてからNHKの「偏向報道」に不満だった葛西が自らの部下をねじ込んだのだった……。

「葛西氏が推す元NHK政治部記者を副会長に据えるのを断っただけ」でなく、松本会長は原発事故を巡る報道でも現場に圧力をかけようとしなかった」とNHK幹部は語るが、これに激怒した葛西が松本降ろしを仕掛け、職員の削減や

受信料値下げなど、多くの成果を出していた松本は1期だけでの交代となった。後任に就いた三井物産元副社長の初井勝人は言うに及ばず、前田晃伸（みずほフィナンシャルグループ元会長）の会長就任にも葛西は深く関与しているとされる。ちなみに、前田は葛西後任の国家公安委員という来歴だ。

経営者の法を踏んで、わが国道徳の大審問官を気取る葛西——。ところで、東洋経済の祖である石橋湛山は、山縣有朋の死に際して「死もまた社会奉仕」と評した。一方、最後の帝国官僚は37年のリニア全線開通をも見届けようという気軒高という。その生涯を評す言葉を聞くには、あと20年ばかり時間を要しそうである。（敬称略）

プリーズ、虫めがね！

菊池桃

その

往年のアイドル、菊池桃子を仕留めた経産省の新原浩朗局長。その陰で、人知れず落涙したのが財務省の矢野康治・主税局長。というのも、一様大時代は桃子の追っかけだったとか。ここでも経産一強ぶりが…。